

平成 30 年度

川上村インターンシップ報告書

期間：平成 30 年 8 月 10 日～8 月 23 日

愛媛大学社会共創学部産業マネジメント学科 2 年 谷口丈太

島根大学大学院 生物資源科学研究科 2 年 藤井春菜

大阪大学大学院 法学研究科 前期 1 年 森重 将人

大阪経済法科大学法学部 3 年 山下兼一

1. はじめに

➤ 自己紹介

名 前：谷口丈太（たにぐち じょうた）

出 身：兵庫県丹波市

所 属：愛媛大学社会共創学部産業マネジメント学科2回生

➤ 参加動機

- ・ (株)古川ちいきの総合研究所にてインターンシップ参加時に15回ほど川上村へ訪問させていただいていたことが川上村を知るきっかけになった。
- ・ 林業への興味があり、吉野林業発祥の地へ滞在しお話を聞いてみたかった。
- ・ 大学では地域の課題解決を勉強しており、実際に地域に入って課題解決について考えてみたかった。
- ・ どうしても川上村の川に入ってみたかった。

2. 活動を通じて学んだこと

➤ 活動日程

8月10日	各課挨拶回り、歓迎会
8月11日	河川パトロール、川遊び
8月12日	休日（不動窟、馬酔木にて人知のシェアハウスのみなさんと焼肉）
8月13日	東部地区盆踊り大会準備・参加、川上村の魅力レクチャー、かわかみらいふの活動についてのレクチャー
8月14日	林業レクチャー、井光会の写真展、井氷鹿の里、御船の滝、森と水の源流館、丹生川上神社上社
8月15日	東川盆踊り大会準備・参加
8月16日	かわかみらいふの活動お手伝い（移動スーパー、生協配達）
8月17日	かわかみらいふの活動お手伝い（移動スーパー、生協配達）
8月18日	やまいき市お手伝い（野菜の集荷と販売補助）
8月19日	休日（井氷鹿の里にてアマゴ釣り、川遊び）
8月20日	筏場の天然林見学、旧東熊野街道散策、朝日館にて夕食
8月21日	大滝ダム誌を読む会、大滝ダム学べる防災ステーション、大滝ダム内部見学
8月22日	インターンシップの振り返り、発表資料作成、木匠塾のクロージングパーティ参加
8月23日	インターンシップ報告会

➤ 活動を通じて学んだこと①—河川パトロールより—

活動初日に河川パトロールに同行させていただき、ゴミの持ち帰りをパトロールカーの中からスピーカーにて呼びかけさせていただいた。こちらに注目してくださる方や手を振ってくださる方など、たくさんの川上村へ遊びにこられた方々に対して呼びかけをすることができた。

同行させていただいた川上村役場水源地課の久保さんと北澤さんによると、今年から警備員

も配置して、川遊びをするお客さんの駐車トラブルの改善などに取り組まれるという話であった。そして、今回同行させていただいた河川パトロールも夏場以外はシルバー人材センターの方たちがされている。

川で遊んでいても遊泳料を取られるわけでもないため、自然は無料で良いと私自身思っていたが、その自然は必ずしも無料でできているわけではなく、お金と労力を誰かがかけているからこそ存在しているということを私は川上村での河川パトロールで学んだ。



➤ 活動を通じて学んだこと②—人生の先輩方より—

インターンシップの中でいくつか役場の方よりレクチャーを受ける機会をもうけていただいたが、その中でも特に印象に残っているフレーズが2つあった。

1つは源流ツーリズム推進室の佐藤充さんからの言葉で、もう1つは、上田一仁参与からの言葉である。このお二人からのレクチャーは別々の日だったにも関わらず、最後に共通するメッセージを頂けたことにとっても感動し、その点においてとても印象に残っている。

その言葉とは、佐藤さんは「アウトプットがあるのはインプットがあるからでしょ？インプットの組み合わせがアウトプットなんです。だからたくさんインプットを今はしてください。」という言葉だった。そして上田さんからは「インプットの積み重ねがアウトプットの質を良くするんです。今は必要ないと思ってもとりあえず頭の片隅に置いておくと10年後くらいに繋がる時が来ます。」という言葉を受けた。

これまでたくさんの経験を積み重ねてきた人生の先輩方が「インプットを大切にしろ」という共通の言葉をくださったからには、今回のインターンシップでたくさんインプットのシャワーを浴びてやるぞ！とこの言葉のおかげでたくさんの方と積極的にお話することができた。



➤ 活動を通じて学んだこと③—かわかみらいふ・やまいき市の活動より—

かわかみらいふとやまいき市のお手伝いをさせていただいて、福祉機能と営利機能の両輪を地域内で回す仕組みを勉強させていただいた。

かわかみらいふの場合であれば、移動スーパーの利用者の方の中には、足の状態があまり好ましくなく、一人ではなかなか買い物に行けない方もいて、私がお話させていただいた方は、以前は友人に誘われた時に一緒にバスで買い物に行っていたが、バスの便が少なく1日がかかりで大変だったため移動スーパーは大変助かっていると仰っていた。そういった福祉機能を持ちつつも、移動スーパーは年間3500万円を売り上げ、村から出ていくお金を少なくすることに貢献している。

やまいき市の場合であれば、集荷や販売の際に生産者の方々と、あるいは購入者の方々とコミュニケーションに場としての福祉機能がある一方で、やまいき市を運営する費用はその売り上げから賄われている。

このように地域内での循環の仕組みを身をもって学ばせていただいた。



3. 川上村の魅力

➤ 川上村の魅力①—木と人の営み—

8月20日は水源地の森に行く予定であったが、道中で電線に倒木が引っ掛かかっており、向かうことができなかった。しかし、森と水の源流館の木村さんの提案により筏場の天然林と旧

東熊野街道を散策することになった。

筏場では天然林を、旧東熊野街道では人工林を見ることができたため、その両者の様子を比較することができて大変貴重な経験となった。私は特に人工林の様子がとても記憶に残っている。それは、人の営みその様子から見て取れたという点が大きい。

木村さんが、この木は今何年生で、大体何回目の間伐かということなどを解説してくださったこともあり、その人工林がどのようにしてできたのかを想像することができた。

さらに川上村は吉野林業発祥の地のため、その歴史は古く、今の施業の様子から、もっと遡った昔の話を知ることができるのも川上村ならではの魅力ではないかと思う。



➤ 川上村の魅力②—守られてきた水—

活動初日の河川パトロールは、私は午前中の部であったため、午後からは自由時間であり、その時間を利用して念願の川遊びへ出かけた。

真夏に入る川上村の清流はこれ以上ない最高の癒しであり、透き通る水は全てを忘れさせてくれた。

私は午前中に河川パトロールへ同行し、自然はタダじゃないということを学んでいたため、全身で感謝をしながら川上村の清流と一体化するかの如く流れに身を任せていた。川上村の活動、源流への想いを知ってしまった私にとって、これはタダのきれいな水ではなく、顔の見える人たちが一生懸命守っている清流なのである。そう思いながら、川で遊ばせていただいていた。

私はそんな川上村を流れる川をとっても魅力的に思う。



➤ 川上村の魅力③—温かい人の輪—

今回のインターンシップでは、2つの盆踊りに参加させていただいた。地元でも盆踊りはあったのだが、盆踊りといえば大人が踊るものだとばかり思っていて、実は1度足りとも踊ったことはなかった。そのため、今回の川上村での盆踊り大会はとても楽しみにしていたのである。

そして、盆踊り大会の準備からさせていただけたのがとても良かったのではないかと感じている。そこの地域の方と協力し、日中は共に汗を流し、夜になると櫓を囲んで盆踊りをする。よそ者ではあるが、一緒に行動をさせていただいて輪の中に入れていただけたような感じがしてとても嬉しかった、川上村の皆さんの温かみを感じた時間であったと思う。



➤ 川上村の魅力は「樹」「水」「人」にあり

川上村は村づくりのスローガンとして、樹と水と人の共生というものを掲げているが、私は知らぬ間にその3つに対して魅力を感じていることに気が付いた。言葉通り川上村では樹と水と人が共に支え合って存在していることを感じる事ができた。



4. ネクストアクション

➤ 私の「好き」って？

川上村と私の繋がりを考えた時に、私の「好き」が川上村にはあるという面で繋がりを感じた。

その私の好きとは「自然と人の営み」である。私はこれまで、休学して農家さんを回ってお手伝いをしてきたり、林業に興味を持ち、川上村をはじめ様々な場所で勉強させていただいた。その原動力の根底にあるのが自然と人の営みが好きだという気持ちであった。

そして、川上村には先述の樹と水と人の共生を感じさせてくれる様々な営みがあった。私はそんな川上村の「魅力」と自分の「好き」が、川上村と私とを繋ぐものであると感じた。

自然 × 人の営み



➤ 私の5つのネクストアクション

川上村と私の繋がりを踏まえ、私は自然と人の営みを組み合わせていかに豊かに暮らしているかを考えたいと思った。そして、以下の5つをインターンシップ最終日にネクストアクションとして発表させていただいた。

1. 大学に戻ったら理論的に地域課題の解決を勉強する。
2. 中流、下流の取り組みも勉強してみる。
3. 地元はどのように自然を生かしているのかを知る。
4. 定期的に川上村を訪れて変化を見に来る。
5. 友達と遊びに来ます！

川上村でのインターンシップは川上村との繋がりを作るためのきっかけで、いわば始まりであると考えている。これからの川上村との関わり方を楽しみに、まずは大学での過ごし方を改めて考え直して行きたいと感じたインターンシップであった。

5. 川上村の七不思議

※インターンシップ中に見つけた川上村のおもしろ七不思議です…。

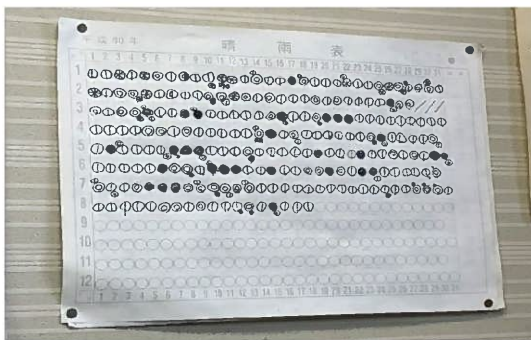
➤ その1～昼夜を問わず国道に響き渡る応援～

これは随分早くに見つけたのですが、国道から井光へ行くために渡る橋の手前にあって、車が踏むと振動がくる場所なのですが、なんとそのリズムが三三七拍子になっているのです。何だか毎回運転を応援されている気分でした。



➤ その2～いつの間にか更新されていく晴雨表～

役場の食堂の奥に毎日の天気を記録する晴雨表があるのですが、不定期に更新されていることにインターン途中で気が付きました。一体いつ誰が記入しているのだろうと密かに気になっていました…。

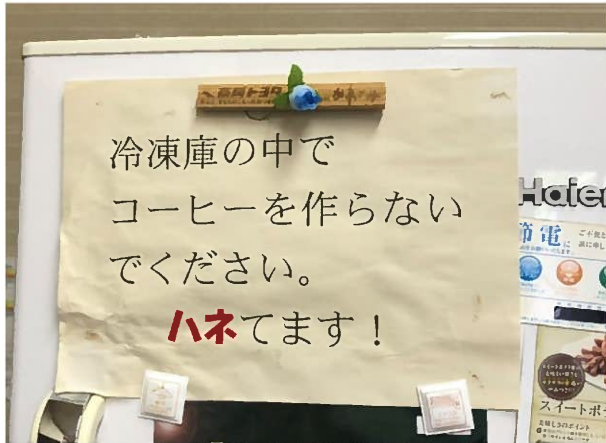


実はこれは、報告会の後に食堂の福田さんが記入されていることが発覚しました。不定期にと余計なことを言ったばかりに、福田さんの仕事を増やしてしまわないか少し心配になったインターン生でありました。



➤ その3～どういう現象か想像できない注意書き～

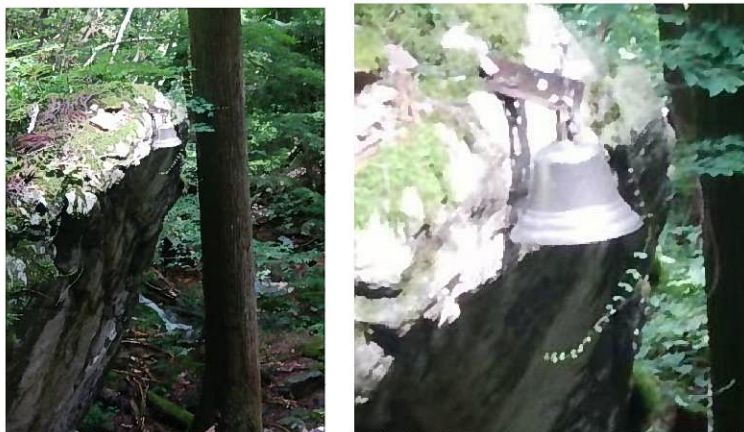
これまた役場の食堂での謎だったのですが、食堂の冷蔵庫に「冷凍庫の中でコーヒーを作らないでください。ハネてます。」という注意書きが貼ってあり、インターン生一同は大変理解に苦しみました…。



これまた食堂の福田さんにお聞きして、やっとどういうことか理解することができました。役場の食堂を利用する方たちであればこの注意書きはとてもありがたいのだという…まだ知らない皆さん是非予想してみてください。

➤ その4～御船の滝のそばにある“あの鐘”を鳴らすのは…～

井光にある御船の滝に行った際に見つけたんですが、滝に着く10mほど手前にある大きな岩のてっぺん近くに、鐘が取り付けられているのです。一体誰が何のために取り付けたのか、そして、あの鐘を鳴らすのは…一体…。



こちらも報告会后、推定ではありますが、吉田眞一さんという方が取り付けられたのではないかという話があがりました。そして当時は紐がついていて鳴らすことができたという声もありました。

➤ その5～ちょっとおもしろ英語表記？～

川上村内の券売機に日本語で書かれた下に英語表記と思われるものがあったのですが、よく

見るとローマ字での表記でした。なかなか面白いなと思い写真に収めました。後でよく見ると、「大盛り」だけは、「large」としっかりと英語表記でこれで外国人もお腹いっぱい食べることが出来そうです。



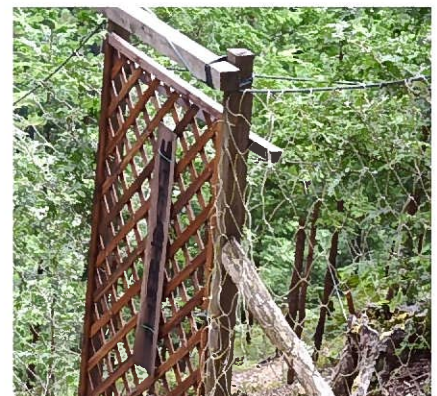
- その6～いつの間に準備されていたのか、お茶とスイカ～

かわかみらいふの生協配達のお手伝いでのこと、私ที่บ้านに商品を届けに行くと、待っていたかのように、お茶やら、スイカやらを出してくださる村民の皆様…。皆さんのお力になるはずがこちらが癒され続けました。



- その7～優しすぎる注意書き～

東熊野街道で見つけた謎。ヒノキの苗木を鹿から守るために柵をされていましたが、その柵の出入り口に「あけたら必ず閉めてね」と書いてありました。インターン生の1人は林業をする人は厳しいイメージがあったため、その優しすぎる口調に驚いたそうです…。



私のネクストアクション
「水と森と生きる地域づくり」

島根大学大学院 生物資源科学研究科 2年 藤井春菜

1. きっかけ

川上村との出会いは必然だったのかもしれない。

再生可能エネルギーの一つ、“生物由来の有機性資源”と定義されるバイオマス。その中でも、おが屑や廃材等の“木質バイオマス”の可能性に心を惹かれ、修士論文においても、木質バイオマスのエネルギー利用の事業化を妨げる要因を明らかにすることをテーマとして取り組んでいる。設置後はメンテナンスがメインの太陽光や風力とは異なり、木質バイオマスは、燃料供給が必要不可欠であり、地域経済の循環や雇用の創出にも一役買い、さらに林業の活性化にもつながる可能性に大きな魅力を感じた。

しかし、島育ちで林業科出身ではない私にとって“林業”は身近な存在ではなかった。“森で働く人はどんな未来を考えているのだろうか”

そんな疑問を解決したいと思い飛び込んだ“株式会社 古川ちいきの総合研究所”でお勧めされたのがこの“川上村インターンシップ”である。

川上村には、現在 7 名の地域おこし協力隊の方が活躍されており、移住者の人数も増えていると聞く。なぜ、そんなにも多くの人を惹き付けるのだろうか。

さらに、同封されていた川上村の案内パンフレットは一面の星空。村を挙げての星空推し。一体、どんな村なんだ？ そんな疑問とワクワク感で、川上村でのインターンシップが始まるのが待ち遠しかった。

2. 川上村での学び

この 2 週間、アルポールでの歓迎会に始まり、日々お世話になった川上村役場、宿泊先の匠の聚やシェアハウス、不洞窟、蜻蛉の滝等の観光地等、30 近くのスポットでお世話になった。特に、丹生川上神社の望月宮司、栗山村長とは、何度も村内でお会いし、この偶然の出会いには驚かされた。

一日、一日がとにかく濃密だった。

その場だけでは終わらない、学びがここにはあった。

その中でも、特に学びの深かった林業と人の温かさについて触れてみたい。

2. 川上村での学び

- ・川上村役場
- ・あるぼーる
- ・シェアハウス
- ・匠の聚
- ・やまぶきホール
(記憶Ⅱ写真展)
- ・不動窟
- ・東部地区盆踊り
- ・井光写真展
- ・かわかみらいふ
- ・井氷鹿の里
- ・御船の滝
- ・未来の風景づくり
- ・東川盆踊り
- ・シーズン
- ・馬酔木
- ・道の駅 杉の湯
- ・十二社神社
- ・丹生川上神社上社
- ・やまいき市
- ・蜻蛉の滝
- ・手作り工房 雄
- ・ログキャビン高原
- ・上多古(川遊び)
- ・筏場
- ・旧東熊野街道
- ・朝日館
- ・大滝ダム学べる
防災ステーション
- ・大滝ダム
- ・大迫ダム
- ・木匠塾
- ・森と水の源流館
- ・川上村立図書館
- ・大滝茶屋
- ・ヨシスト

30か所以上でお世話になった、密度の濃い2週間。

5

“林業のある暮らし”

8月20日(月)、心配な雨も何とか持ちこたえ、待ちに待った原生林、「水源地の森に突入！」と思いきや、電線に倒れ掛かった一本の木。水と森の源流館の木村さんの英断のもと目的地は変更となった。代わりに訪れた筏場と旧東熊野街道は、“林業のある暮らし”を想起するにはうってつけの場所だった。

かつて四国からも出稼ぎを募り、一大集落となっていた筏場。
かつての小学生の通学路であり、修験道に通じる旧東熊野街道。

旧東熊野街道は、伯母谷から柏木をつなぐ尾根伝いの道である。川沿いの道よりも安全な尾根伝いの道は古くから利用されており、様々な文化や歴史もこの道を通じて伝わったという。しかし、かつてシーボルトが持ち出した日本地図にその地名が書かれる程栄えていた伯母谷も、今は数世帯が暮らすのみだ。1年前、木村さんたちが整備された東熊野街道。歩けないことはないが、橋が渡りにくくなっていたり、巨木が道を塞いでいたりする。

吉野杉林。心地よい風が吹き抜けていく。枝打ち、下刈り等の一つ一つの作業があって、今の姿があることを学ぶ。

茶屋跡。無くなって初めて気が付く、茶屋の存在。喉を潤すだけでなく、一つのコミュニティの場であり、歩きやすいように尾根道を整備する役割も担っていた。

生きた化石、トガサワラ。国内の限られた地域にしか生息しない貴重な木だ。「ほら、

これがトガサワラぼっくりだよ。」と手渡されたが、いまいち違いがよく分からなかった。最後は朝日館の女将さん特製の釜土ご飯、鮎の塩焼き等、美味しいご飯を食べて一休み。人が歩くから、手を入れるからこそ成り立つ自然との共存を感じた一日だった。

2. 川上村での学び：林業のある暮らし

～旧東熊野街道を歩く～



500年生の大イチョウ



石積み



トガサワラボックリ

2. 川上村での学び：林業のある暮らし

～旧東熊野街道を歩く～



吉野杉の美林



茶屋跡にて



朝日館前で集合写真

“人を惹き付ける川上村”

川上村でお世話になった方々の温かさは忘れられない。“盆踊り”と“かわかみらいふ”は特に印象に深い。

13日の東部地区の盆踊りでは、村の人に限らず、私達インターン生、移住者、地域おこし協力隊の方、旅行客の方まで参加されていた。誰でも気軽に参加出来る盆踊り、このフランクさには驚かされた。そして、皆さまのおかげで、私たちはちゃっかり、「お団子300本を完売せよ」という玉井久勝さんからのお題をクリアし、貴重な収入をいただいた。

15日に烏川神社で行われた東川盆踊り大会は、消防団が中心となって運営する。雨が降るのか降らないのか、はっきりしない天気の中、全員の想いを汲んだ佐藤充消防団長の「やりましょう」という一声を契機に、準備はどんどん進む。櫓の脚に紅白テープを巻く大切な作業を一人一本ずつ担当させていただき、個性あふれる櫓が皆さんをお迎えすることとなった。

盆踊りがあることを知らせる太鼓の音が村に響く。お客さんを待ちながら、地元の方と話す中で、地元因島の話で盛り上がると思いもしなかった。「わしの友だちの藤井さんだよ。」そんな風に紹介していただくのは少し恥ずかしくて、でも嬉しかった。また、村の人と移住者、そして留学生も加わり、盆踊りは最高潮を迎える。想いが通じたのか、雨は最後まで降ることはなかった。



“一般社団法人 かわかみらいふ”は、安心して生き活きと暮らせる村を作りたいと、宅配代行や移動スーパー事業の買い物支援やガソリンスタンド事業等を展開されている。

2日間かわかみらいふでお世話になる中で、宅配代行、移動スーパーに二手に分かれ、1日ずつ同行させていただいた。宅配代行では、車1台通るのがやっとの狭い山道を重たい荷物を積んだトラックで上がっていく。「こんにちはー！かわかみらいふです。」元気な声が家の中に届き、おばあちゃんが待っていましたとばかりに出て来られる。「暑かったですでしょう。はい、アイスあげるわ。」と飲み物やお菓子をいただいた。「お盆は忙しかったですか？」「いやあ、ほんとに疲れましたよ」、「そういえば、あその○○さん、今度結

婚されるそうですよ。」…。話のネタは尽きない。気づかない間に時間は過ぎていた。「また、来週来ますね。ありがとうございます！」来週、私はこの場にはいない。そう思うと寂しい気持ちと同時に、村民の生活を支えるこの事業が続いて欲しいと思う。

社員の猪腰さんは、楽しそうに仕事のやりがいについて話してくださった。「覚えることも沢山あって大変だけど、話すことが好きだし、生活の知恵を村の人から教えてもらえるし、楽しい仕事だよ。子どもたちものびのびと遊べるしね。」温かく迎えてくださる村民の方の寛容さ、安心して楽しく働き、暮らせる環境があること、そして移住者が欲しい情報がきちんと発信されていることが人々を惹き付けるポイントの一つとなっているのではないだろうか。



3. 川上村で見つけたキーワード

この2週間を通して、普段の生活や生き方につながる気づきをいただいたので、ご紹介したい。

①ある資源を活かす

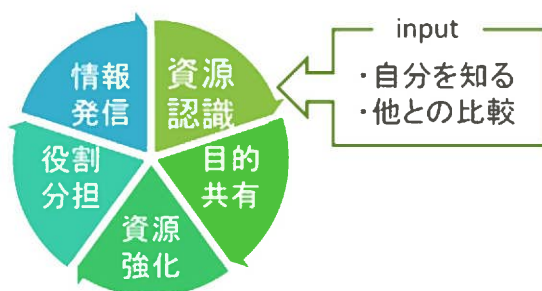
「川上村は、川上村にある資源にちゃんと気が付けたことがえらかった。」朝日館で休憩中に、水と森の源流館の木村さんが言われたこの言葉にはっとさせられた。田舎でよく聞く「ここは何も無いとこやからね。」でも、何も無いってそんなことある訳がない。私が、整然と立つ吉野杉林に感銘を受けたように、多くの観光客が、清流を求めて山奥にまで足を運ぶように、ここには他にはない魅力に溢れている。

しかし魅力は、他と比較することによって、または魅力が失われることによって気づくことが多いように思う。川上村は、天然林の開発が進み、川や森が元気を失ってきたことによって、この自然が自分たちの魅力だと気が付いたという。周りがバブルに浮かれている時に、地道な道を選んだ川上村はすごい。全国の川上の村でまとめた「川上宣言」という共通認識は村民にまで広がる。約10億円をかけて守った743.4haの天然林は資源の強化につながった。役場だけでなく森と水の源流館や大滝ダム・学べる防災ステーション、

会社、そして村民一人ひとりが意識してこの村づくりに取り組んでいる。そして、ホームページ等を通して積極的に村の取り組みを発信している。この 5 つによって、資源を活かすことが出来るのではないだろうか。

3. 川上村で見つけた“キーワード”

1. 今ある資源を活かす



Inputが今ある資源を活かすことにつながる?!

11

② 当たり前を支える、創る

最終報告会の日、台風は確実にこちらに近づいてきていた。いつもは透き通った川が、白龍のように勢いよく暴れている。窓の外も横殴りの雨だ。役場も台風に備えてピリピリしているのが伝わってくる。夜通し役場に泊まり込みで、翌朝は道路や施設に被害が無いが見回りに行かれると伺った。

こんな非日常を経験して気付く、当たり前の生活のありがたさ。そして、この当たり前の生活は、多くの人の仕事や気遣いによって支えられていることを知る。

しかし、下流に暮らす中で、水道水がどこから来ているのか、利水・治水ダム建設でどれだけの方が苦しい想いをしているのかを考える機会は少ない。ましてや自分が生まれる前のことだったら、尚更考える機会が無いだろう。水だけでなく、野菜、魚、家具、テレビ、自動車…。身の回りにある全てのものが誰かの手によって造られている。だったら、ちゃんと自分の意志で商品を選んでいきたい。そう思うと、周りは知らないことだらけである。一方、これからの時代には適さない当たり前を創り変えていくことも、また私たちの仕事である。何が求められているのか、何がおかしいのかを見極めていかねばならない。

③ 目線を紡ぐ

何が求められているのかを見極めていく上で重要だと思うのが、公益財団法人吉野川紀の川源流物語 事務局長の尾上さんがおっしゃられていた「色々な立場の人の目線を紡いでいくことが合意形成だ」という一言である。

人生をかけるような大きな決断をする時、私たちは調べて、研究して、話を聞いて、とにかく情報を集める。その時、偏った情報だけではより適切な解は出てこないし、少ない情報量だと自信をもって前に進めない。社会に影響を与える決断であるならば尚更だ。でも、結局最後に決断する時に働くのは勘である。その勘を研ぎ澄ましていくためにも、情報の質と量、多くの経験を繰り返すことを意識していきたい。

3. 川上村で見つけたキーワード

3. 目線を紡ぐ

色々な立場の人の目線を紡いでいくことが合意形成だ



避けては通れない対立。まずは目線を知り、そこから紡いでいく。

13

4. Next Action

川上村でのインターンシップを通じて、私は、「目線を紡ぎ、当たり前を創っていける人財」になりたいと思うようになった。そのための Next Action として次の 3 つに取り組んでいきたいと思う。

① 林業・地域づくりに関する input を増やす

まずは研究や調査を通し、林業や地域づくりに関する基本的な考え方を押さえると同時に、現場の声やどのような取り組みがされているのかを積極的に追及していきたい。

② 当たり前を知り、感謝する

普段の生活の中にあふれている仕組みやモノ。私達の手元に届くまでにどのような工程を踏んできているのか、どんな意図や背景があるのか、知らないあたり前をどんどん明らかにしていきたい。そして、その一つ一つに感謝していきたい。

③ どう生きていきたいか、自分と向き合う

①や②を踏まえた上で、どんな未来をつくっていきたいのか、何をしていることが幸せ

なのか、何をして生きていきたいのか、自分と向き合い、決断し行動に移していきたい。

そして、ここで得た川上村の皆さんとのつながりをこれからも大事にしていくためにも、まずは、川上村での学びを発信すること、そして川上村の情報にアンテナを張り、周りの方々に伝えていきたい。また、研究や生き方を通して、少しでも楽しく、生き活きと過ごせる場を作っていきたい。そして、また、四季の変化やまだ体験出来ていないカヌーや水源地の森を楽しみ、皆さんとお会いするために、お邪魔します！

長文にも関わらず、最後まで読んでいただき、ありがとうございます。
まだまだ書ききれないことも沢山ありますが、あなたなりの川上村での学びを、楽しみをぜひ味わってみてください！楽しみにしています！

2週間という短い間でしたが、温かく受け入れていただき、また沢山の学びをいただき、本当にありがとうございました！

特に川上村役場 水源地課の吉田 志帆さん、加藤 満さんには大変お世話になりました。どうぞ、これからもよろしく願いいたします。



平成30年度川上村インターン

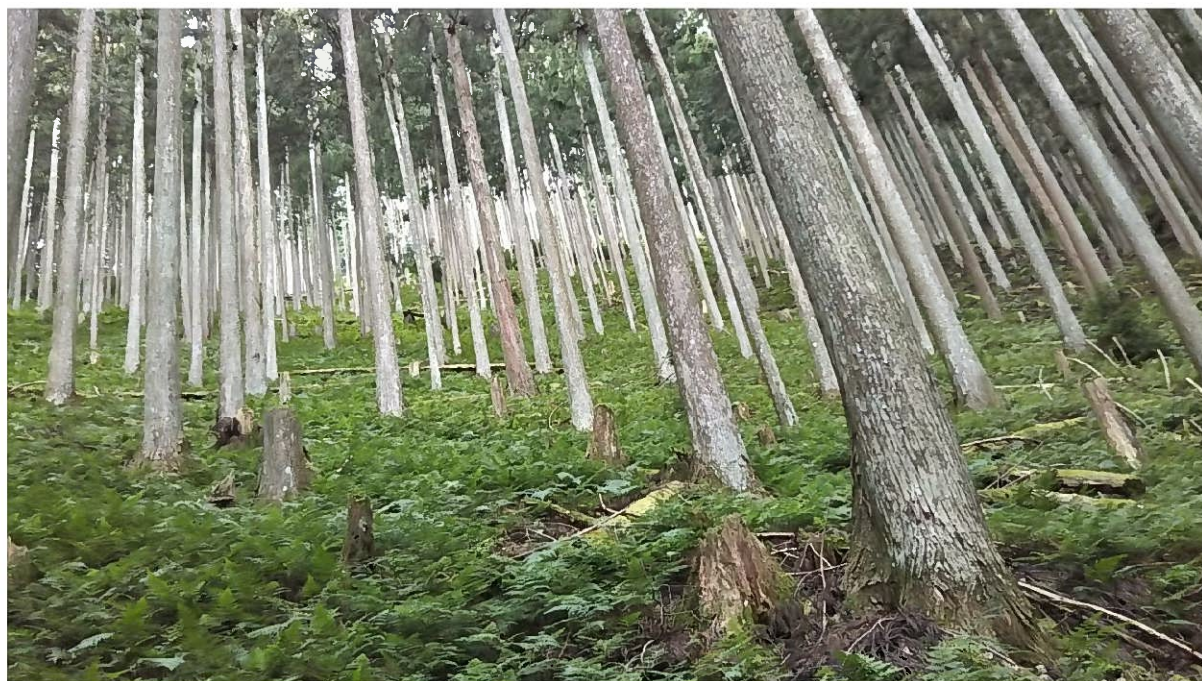
川上村で過ごして生まれた私のネクストアクション

大阪大学大学院 法学研究科 前期1年

森重 将人

平成最後の夏、川上村で過ごした二週間は、毎日が驚きと発見に満ちて、私を、懐かしく、新鮮な気持ちにしてくれました。様々な活動の機会を用意していただいた中で、独特なリズムを要求する盆踊りと、急遽決まった旧東熊野街道探索は、文化的感覚、生活空間と自然環境との結びつき、一体性に対する感受性を大いに刺激してくれた点で、印象的な体験でした。

日々の活動をこなす中、私が考えていたのは、最終日のネクストアクションの発表に向けて、どのような内容にしたら良いのか、ということでした。この点、私は二つのことを念頭に置いて、発表を組み立てようと思っていました。一つは、なるべく多くの方のお話を伺って、その多様な見方を反映させること、そして村が掲げる「水源地の村づくり」について、その意味するところ、背景、未来像について考えること、この二つです。内容構成にあたって、かつての村の景色を収めた回顧展「記憶Ⅱ」を、撮影者の鍵谷さん、そして栗山村長を交えて拝見する機会に恵まれたことは、発表の方向性を決めるうえで、とても有難いことでした。



〔旧東熊野街道を歩いて〕

1. 参加したきっかけ

再生可能エネルギーや過疎地での行政の取り組みへの関心もある中、山へ行きたい、星空を見たい、そういった、川上の自然に触れたいという思いが強くありました。アマゴ、鮎、味覚も含めて、素晴らしい自然体験が出来ました。



〔柏木区の山の神〕

2. 活動を通じて学んだこと、感じたこと

水源地の村づくりとは何か。記憶Ⅱにて、小学校三年生以前の吉野川の光景が今でも思い返される、というお話を村長から伺いました。その時、水源地の村づくりとは、「ダムによって見えなくなってしまったもの」を、これからも「感じられるようにする」村づくりなのではないかと思いました。言い換えると、川の流れを心にとどめ、思い返し、川上の存在意義をダム開発のその先に見出してもらい、そのための地域づくりの方法、仕掛けなのではないか、そのように感じました。

ダムのおかげで、水害の危険性は減りました。ほかにも発電や水道、工業用水の補給など、おもに利水目的の大迫ダムを含め、大滝ダムは多様な機能を担っています。一方でメリットを負担し、差し出す側のエネルギーは、公共性が大きくなればなるほど、見えにくくなります。ダムによるメリットを享受している下流域、都市部を含め、すべての人々に、せめてダムを受け容れた川上の地に思いをはせてほしい、せめて失わざるを得なかったものを感じてほしい、それが水源地の村づくりの動機ではないかと私は感じました。そして実際に、川上をどう感じてもらうか、人々の心と川上をどうつなぐか、それこそが、水源地の村づくりの目指そうとしているところだと思いました。



〔私たちの体＝水を通じて、第二のふるさと「川上」とつながる〕

3. このインターンシップを通じて一番重要だと感じたキーワード

「源流」と「存在意義」、この二つが重要だと感じました。

源流ツーリズム、源流学、村ではこの言葉をよく見聞きします。私にとってこの言葉は、人間を取り巻く環境としての自然環境、そして人間自身の衣食住としての社会環境、これら二つの接点、融合を指し示す言葉、世界観だと思いました。

言い換えると、源流というのは、すべての文化、産業、自然、あらゆるもののふるさとである、ということになります。というのも、水は、すべての生命の根源であるからです。水がなければ生物は生きてはゆかれませんが、水がなければ、産業も文化も、衣食住も成り立ちません。自然環境と社会環境とは、同じ一つ所から出てくる、そうした世界観を私たちに教えてくれる場所として、源流、水源地としての川上村はあるといえるのではないのでしょうか。

もう一つのキーワード、存在意義は、ダムの開発に関わります。私は恥ずかしながら、村に来るまで大滝ダムの存在について知りませんでした。それでも、圧倒されるスケールでそびえ立っているダム、その開発にあたって、どれだけのエネルギーが払われたか、その点を思わずにはいられませんでした。

ダムは自分たちのために造ってもらったのではない、他所から持ち込まれたものである、でもだからといって(だからこそ)、すべてをダムに飲み込まれたわけではありませんし、川上＝ダム、というわけでもありません。むしろダムを受け容れてこそできる抵抗があるのではないかと、そう思いました。というのも、水源地の村づくりの背景、動機には、ダムへの抵抗精神が宿っているように思われたからです。

思い出の中の、記憶の中の風景をはぎ取られて、その寂しさをどこへ向けたらよいのか。そうした思いのなかで、「川上村の存在意義＝ダムの存在意義」という図式を成立させるわけにはゆかない、そうした意味での抵抗精神の表現として、水源地の村づくりはあるのではないのでしょうか。

川上の存在意義は、ダムとは「違うところ」にある、そのための格闘を支えているのは、ダムを生かすも殺すも我々である、そのような思いではないかと思いました。

「違うところ」、とはどこか。それへの答えこそ、世のあらゆるものの源としての「水」を生み出している、まさに源流である、ということなのではないでしょうか。吉野川(紀の川)の源流部として、水を空から受け止め、清らかな流れを幾世代にもわたって引き継いでいくことは、川上にしかできないことです。

また、印象的な風景として、「河原」のお話がありました。春のお花見、夏の水遊び、秋のお祭り、運動会、そして六月の鮎釣り。村の四季を映す吉野川の河原は、村一番の大集会場でした。差し出し、失わざるを得なかった、かつての村の象徴を、心の中の風景として、これからも再生し続ける仕組み。そのように考えると、源流ということば、世界観は、伊勢湾台風以前の吉野の流れを、失われた村の風景とともに映し出す、映写機のような役割を果たしているようにも感じられました。



〔後から来る人のために・・・〕

4. ネクストアクション

自然環境と社会環境の一体性、両者のつながりについては、これまで伝統的な知恵を通じて、連綿とその維持、回復が果たされてきました。伝統的な知恵の在り様は、土地によってさまざまであると思いますが、川上の場合は、世界に誇るべき知恵として、吉野林業を挙げることが出来ます。

自然を守り、生業を生み出し、大地を育む知恵として、吉野林業はいままさに、需要の掘り起こしを通じた、新しい時代を迎えようとしています。そうした吉野林業と水源地の村づくりとは似ているように感じました。というのも、双方ともに、自然と文化をつなぐ役目を果たしているからです。

吉野林業は直接的、一方の水源地の村づくりは間接的に、そうしたつながりを感じさせるとい

う違いはありますが、この二つの言葉には共通する営みを感じます。今になって、吉野林業の精神を再発見した、ということかもしれません。

水源地の村として、何百年もその役割を果たしてきたこの村で過ごし、何を持ち帰ることが出来るのか。考える中で、私の関心は森林そのものに向かいました。最近帰省して、木々が伐採されている山がよく目についた、というのがきっかけです。これはなぜなのか、伐採された木々はどうなったのか、これについて調べてみようと思いました。

唐突な流れだと思いますが、自分でも説明が難しいところです。伝統な知恵にコミットして、循環的なライフサイクルを意識した取り組み、例えばはやりのエシカル消費だとか、そうしたアクションもありうると思いますが、私の場合は、森、自然環境そのものを見つめてみようと思いました。もともと気になっていたということもありますが、川上で木々の香りに包まれ、美しく手入れされた木立に触れて、すべての根源としての水を空から受け止める森林の機能について、考えざるを得なかったのだと思います。世の中のライフサイクルの起点としての森林、山、そうした自然環境そのものへの関心を、これまでずっと水源地の村であり続けてきた川上が、高めてくれた結果だと思います。

たった2週間、とても貴重な2週間。私にとって大きな財産であり、川上はこれからの人生を支えてくれる存在だと思います。私がここで考えたこと、学んだことが、私の中に残り続ける限り、川上とのつながりは、切れるものではありません。川上が水源地の村であり続ける限り、それは変わらないと思います。

川上のユニークさは、村に息づく連綿とした営み、一貫性に支えられてこそのもので、先達から受け継がれてきた知恵をいかに次世代につないでゆけるかは、広く社会全体の重いテーマであると思います。

私のネクストアクション

「川上村の暮らしを支えるかわかみらいふで得た経験を次への学びへ」

大阪経済法科大学法学部 3年 山下兼一

● はじめに ～なぜこのインターンに？～

私は行政について勉強をしており、限界集落・高齢化・防災などの時事ネタには常にアンテナを張っていましたが、ニュースでは殆どが我々目線であり、一度行政側の目線になりこれらのことを考えてみたいと思っていました。村での公務員の役割と問題解決にどのような取り組みをされているのか？

もう一つに、私は生まれも育ちも大阪府の堺市で、周りには自然に触れ合う機会がなく大学最後の自由にできるこの夏を使い自然に触れ合いたかったという理由でこのインターンに参加しました。

● 活動を通じて感じたこと

私をはじめに感じた川上村は大きなダム湖があり、その周りに人が住むための集落があるのだなという印象を受け、自然豊で水源地のある村というイメージが違っていたとその当時感じました。そして、私の中で「村」とは閉鎖的なところで村民の方々や、役場の方々に失礼のないようにと最初は張りつめておりました。

しかし、川上村は、国道沿いの集落だけではなく、山の中にも集落がありました。私の行ったところは、東川・北和田・井光・高原・上多古・上谷などを訪れ、その地で様々な人と出会う機会がありました。

そこで村民の方々がまるでご近所のおじさんや、おばさんのような温かさで迎えてくださり、我々のインターン生の質問なども非常に柔らかな笑顔で答えてくださったとき、最初に感じた外者である自分は受け入れられないのではという不安は無くなり、もっと積極的になって関わっていきたいと思えるようになりました。

そして、自然も少し国道を逸れ細い道に入っていくと、きれいな川や滝などあり、季節であるためレジャーや川遊びをしている人たちで賑わっていました。

私がインターン生と行った川は上多古川でそこは海外の観光スポットで紹介されているようなエメラルドグリーンの川そのものでこんな綺麗な川が日本にあったのかと驚き興奮しました。



飛び込める深さであり、このような綺麗な川ははじめてだったので眼鏡を付けていることも忘れ飛び込んでしまい、眼鏡を川底に落としてしまったのはいい教訓と思い出になりました。

● このインターンシップを通じて一番重要だと感じたこと ～かわかみらいふ～

このインターンシップを重ねていくうちに村民の方々の暮らしがこの川上村には重要であることを感じ、豊かな自然とそこに暮らす人達がいて共存であるのだなど考えるようになっていきました。

その考えは旧東熊野街道をあるいているときに出てきたもので、人が住まなくなった土地が自然に還っているのを見て寂しいように感じました。

東側に行けば行くほど、買い物へのアクセスが悪くなり、高齢者の方々はとくに不自由だと思います。さらに山の高い位置にある集落の方々は急な斜面を下らなければならず、冬場は危険であります。

16日から2日間お世話になりましたかわかみらいふの活動はその問題を解決する一つの答えがありました。

いろんな集落へ生活に必要な食品などを運んだり、移動スーパーで集落ごとに停車し、商品を展開する。その場で品を選んで買うことができるといったものでした。

集落の物流はこのようにしてなされ、遠い道のりを行かなくてもいいようになっていきました。



移動スーパー

生協

物流だけでなく、村民の方々のコミュニケーションをする場所にもなり、移動スーパーが停まった場所では買い物ついでに会話をしに来たり、買うものがなくても来て会話をするついでに買い物をするという逆のパターンもありました。

そのとき、健康面もサポートするために保健師の方が同行します。

生協では直接ものを届けます。日報では訪問した人のことが書かれており、天気による熱中症などの心配や何気ない会話の一文など書かれていました。



この仕事で、直接的な人とのかわりであるため、村民の人から「ありがとう」と声が聞け、それがやり甲斐になっていると聞きました。

都会では物にあふれ、店があふれています。人はそれらが当たり前だと思いサービスが悪ければ他に行ける。その環境だからか横柄なお客さまが多いような気がします。

かわかみらいふのように本物の「ありがとう」とやり甲斐は何か強い繋がりや信頼があるから出てくるのだと感じました。

この仕事には危険があります。

それは、高い所に集落があるため、冬場になると滑るそうです。ブレーキを掛けても止まるかどうかは運しだいだそうで、上谷の帰り道ガードレールにぶつかり止まったんだらうなと思える箇所がありました。

人の生活を支えているので少しのミスも大きな事件なります近い関係であるが故の大きな責任も感じました。しかし、集落で待つ人のために活動する姿はカッコいいと思いました。

- 私がかわかみらいふで得た経験を次への学びへ

高齢者の孤立化が進んでいく社会の中、外から見えない山奥ならよりそうだと思います。これらの人たち生活しやすいように支えていて、週に数回ほどでもコミュニケーションすることができる場を作る。心と体の健康を保つための公設民営の会社。

私はこれらを地元で使えないだろうかと考えています。

高齢者が社会から孤立することを防げれば、今問題になっている高齢者による犯罪を防いだり、心のケアにもなるからです。

行政の知識の蓄積はもちろん、かわかみらいふの成り立ちのプロセスの研究、そして地元ではどのような形にするのかこれから大学で考えようと思います。

このような自身の研究課題の発見ができてとても良い体験ができました。学ぶだけでなく遊びでもまた川上村に来ようと思っております。まだ白屋の星空を見てないので今度こそ見に行きたいと思います。

2週間本当にお世話になりました。